第４章（６）僧が見た朝鮮の民衆　― 秀吉の朝鮮侵略 ―

■ 授業づくりの構想

朝鮮侵略戦争は、様々な矛盾を内包して進行したことを多角的にとらえさせたい。特に朝鮮と日本の民衆の姿を追い、人びとが考えていたことを想像させる。

■ 本文・図版・側注解説

図版1『釜山鎮殉節図』2名護屋城　3李舜臣　5蔚山城に立てこもる日本軍　6薩摩焼、囲みの「朝鮮の武将となった沙也可」を詳しく解説。

■ 授業で参考にする資料

①朝鮮民衆の行動 ②朝鮮での検地 ③義兵郭再祐 ④降倭など、朝鮮民衆と日本の民衆の姿を知り、考えを深めることができる資料を掲載している。

■ 授業展開例

〈授業のねらい〉

日本の大軍が朝鮮に攻めこんだ。突然攻めこまれた朝鮮の人びとはどうしたか考える。

〈導入〉

図版1から「変だなぁ」探しをする。

●デジタルデータの画像を拡大して見る。

「城の下に敵がいるが、全員が刀を２本ずつ持っている」「城を攻めている人たちが火縄銃を持っている」「なぜこんなに多くの船があるのか」「城内にひとりだけ女性がいる」

〈展開〉

①戦場のようす

§１を読みながら、日本がどのように朝鮮に攻めていったか説明したあと、質問を受ける。§１から、朝鮮人を買った人買いはどうするのか、買われた人たちの思いを想像する。

②朝鮮の民衆はどのような動きをしたか

資料から、支配階級に対する反発で焼き討ちをしたり日本軍に協力する人もいたことを知り、その人たちの動きを考える。

③どういう戦争だったか

再度、図版１と資料から、どういう戦争だったか考えさせる。

第3部　第4章　教科書 pp.098-099

（6）僧が見た朝鮮の民衆 ―秀吉の朝鮮侵略―

1 授業づくりの構想

・豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争には、秀吉と朝鮮王朝（明を含む）の矛盾の他に、秀吉と朝鮮民衆や戦争に狩り出された日本の民衆、秀吉と日本の大名たち、さらには朝鮮王朝と朝鮮民衆などさまざまな矛盾が内包されて進行したことを多方面から考えさせたい。

・特に朝鮮民衆や日本の民衆の姿を追っていくことでこの戦争の本質がとらえられる。

・戦争のなかで当時の人びとがどのようなことを考えていたか想像させる。

2 授業展開例

〈授業のねらい〉

日本の大軍が朝鮮に攻めこんだ。突然攻めこまれた朝鮮の人びとはどうしたか考える。

●導入…図版1から、「変だなぁ」探しをする。

「なぜこんなにたくさんの船がいるのか」「城が淹に近い」「城内に一人だけ女性がいる」「城の下に敵がいるが、全員刀を２本ずつ持っている」「城を攻めている人たちが火縄銃を持っている」

秀吉軍が釜山を攻めたときの戦闘を描いたものであることを説明する。

●展開１…戦場のようす

1.§1を読みながら、日本軍がどのように朝鮮に攻めこんでいったか説明したあと、質問を受ける。

「人買い商人がいたって本当ですか」「朝鮮はなぜ明に応援を求めたのですか」「日本がどんどん勝っていったのに、蔚山城に立てこもったのはなぜですか」

2.§1から、朝鮮人を買った人買いはどうするのか、買われた人たちはどう思ったのか想像させる。

「日本に連れていく」「連れていって働かせる」「他の人に売る」「日本人はなぜこんなことをするのだろう」「親と離ればなれになって淋しい」「恨む」「日本での戦争のときはどうだったんだろう」

●展開２…朝鮮の民衆はどのような動きをしたか

1.資料①から、支配階級に対する反発で焼き討ちをしたり、あるいは日本軍に協力したりした人たちもいたことを読み取らせる。

「なんのために官舎・官倉や両班邸を襲ったのかな」「道案内をする者がいたと書いてあるけど、後でばれたらどうするのか」

2.自分たちを解放してくれる日本軍に対してその後、どのような動きをしたか、資料②、③から考える。

「怖いから年貢を納める」「逃げる」「義兵にかわる」

郭再祐が立ち上がり、義兵の活動が全国に展開されていくと、日本軍は兵糧などが手に入らず、戦闘が滞ることもあった。秀吉も義兵活動を危険視しはじめ、加藤清正ら前線の大名たちに「一揆ばら（義兵）を徹底的に掃討するように厳命していることを説明する。

●展開３…どういう戦争だったか

再度、図版1と資料④から、どういう戦争だったかを考えさせる。

「日本の民衆は戦争が嫌になって1万人も戦場から逃亡した」「義兵がゞんばった」「大名も秀吉が死んで戦う気力がなくなった」

●まとめ

この戦争は、朝鮮と日本の民衆にとってどのようなものだったか各自がまとめ、発表し合う。

3 本文・図版・側注解説

・図版1

絹本彩色、145×96 cm、陸軍士官学校陸軍博物館（ソウル）蔵。「釜山鎮殉節図」と「東菜府殉節図」を描いたのは、在地画員の下環であった。この絵は、戦争当時の現場を忠実に反映している。ただし、画面下の外城の城門は実際には城外に向かっていなければならないのに逆に描かれている。

卞環は、この2枚の絵を模写してその実力を認められ、1764年の通信使一行として来日し、「松下虎図」や「題清見寺用前韻」という書をしたためた。真ん中に描かれている女性は、指揮官の鄭撥の側室だった愛香であろう。彼女も鄭撥ともどもこの戦闘で死亡した。

釜山鎮の守備兵は、およそ600人で、小西行長らの一番隊が18700人だった。このときのようすを、ルイス・フロイスは「朝鮮人らは、日本人たちが城塞から侵入し始めたのを見ると、ある者は、敵を迎撃し、侵入を防止するために、上から壕へ飛び込んだ」と激しい抵抗を表現している。（ルイス・フロイス『完訳フロイス日本史5』中公文庫、p.207）

・図版2

1591年10月、秀吉は肥前名護屋に「明征服」の拠点とするために築城普請を諸大名に命じた。山が多く、一方は沼地だった荒れ地が、「城下町は京・大坂・堺の者たちがこぞこぞく集まり、望みのものは何でもある」と、軍需景気に沸き立っていた。（笠谷和比古・黒田慶一『秀吉の野望と誤算―文禄・慶長の役と関ヶ原合戦』文英堂、p.36、要約）

名護屋城は、東西約600 m、南北約360 mに達する巨大な石垣づくりの城だった。（同前、p.37、要約）

築城にあたっては九州の大名に総動員がかけられ、島津氏も農民を雑役労働に送ったが、農民たちは「あまりの辛さに夜逃げした」という。（北島万次『王辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』校倉書房、pp.19～21、要約）

・図版3

李舜臣は、亀甲船を活用して日本水軍に打撃を与え、戦争を勝利へと導いた。1598年の露梁の海戦で死亡する。同時に、朝鮮水軍も身分制の下にあった。船漕ぎは主に奴婢が担当した。兵量不足や寒さに耐えかねて逃亡した者も多かった。（北島万次『秀吉の朝鮮侵略と民衆』岩波新書、pp.142～147、要約）

・図版5

1597年末から1598年初頭にかけて行われた蔚山城の攻防戦を描いている。図版中央に城内に立てこもった加藤清正ら日本軍が描かれ、幾重にも城を取り囲む明・朝鮮軍がいまにも主郭部分に攻めこうもとしている。清正らは開城寸前にまで追い込まれたが、駆けつけた救援軍に救われる。慶念はこの城内の状況を「死タル馬ノ股ヲ切取テ、矢ノ根ニ射込シ矢ト毛薪トシ焼テ食シケル」ところに寒気が加わり、「此城の雖儀い三ツにきわまれりささひたる さホののミたさ」と描写した。（朝鮮日々記研究会編『朝鮮日々記を読む―真宗僧が見た秀吉の朝鮮侵略』宝蔵館、p.201、要約）

・図版6

1597年に南原の戦いで島津氏に捕らえられた人びとは、いったん各地に居住したのち、1603年に苗代川辺に移住した。この中に陶工がいて、彼らを中心に薩摩焼が始められ、島津が彼らを優遇したという。（前出『王辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』pp.91～104、要約）

・囲み

沙也可の実像についてはよくわかっていない部分もある。沙也可の子孫が編んだ『慕夏堂文集』の記述をそのまま事実として認めることはできない。多くの降倭の中で人物像が比較的わかりやすい例と考えるのがよい。

「秀吉の出兵に大義なし」として、彼は朝鮮国王に忠誠を誓い金忠善という名前をもらっている。日本軍との戦いに参加したばかりか、1596年に朝鮮中部で起きた蜂起の鎮圧に積極的に参加した。（貴井正之『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵研究』青木書店、pp.238～259、要約）

4 授業で参考にする資料

資料①…朝鮮民衆の行動

200年にわたって支配者として君臨してきた両班の大半は、日本軍の侵入とともにいち早く安全な地域に逃亡した。残された民衆は、長年来の封建的束縛から一気に解放されると、弱体化した従来の支配者たちに公然と反抗し、官倉・官物や両班邸を襲い、略奪、放火に走った。新支配者の日本軍へ投降する者も多数出た。積極的に日本軍に協力し、道案内をする者、官倉・官物の所在を教える者も出た。会寧地方の民衆は二人の王子まで捕らえて日本軍に引き渡した。（同前、p.38、73、要約）

資料②…朝鮮での検地

成興府内各村上納員数の事　高邊村
下遠米（玄米）　20石
田米（粟）　103石
唐米　15石
太（大豆）　230石
稗　380石
租（籾）　82石（略）
右書貢物員数を上げ奉る。毛頭、違変においては、以往各々首を刎ねらるべき者なり
朝鮮万暦20（1592）年7月28日
成興府衝前都務　尹希　（略）

（貴井正之『秀吉が勝てなかった朝鮮武将』同時代社、pp.51～53から作成）

資料③…義兵郭再祐

1592年、慶尚南道の郭再祐が「このままでは吾が父母妻子は日本軍の餌食になってしまう」と立ち上がった。日を追うごとに周辺民衆が郭再祐の元に集まってきた。それは、「民衆に迷惑をかけた者は斬る」とはっきりと宣言した軍隊だったからでもあった。（同前、p.57、76～77、要約）

資料④…降倭

戦争中に日本の陣営から朝鮮側、あるいは明側に投降した日本人は「降倭」と呼ばれた。投降者は、「30歳前後の年少の者が多」く、大半は雑兵だった。出征兵士の60％以上は農漁民の雑卒で占められ、強制的に徴発された。降倭、逃亡も含めて1万人を超えた。（前出『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵研究』、pp.260～266、要約）

その一人が「囲み」に出てくる沙也可である。

参考文献

●久留島浩・須田努・趙景達編『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』（岩波書店、2014年）は、薩摩焼をめぐる現代に至る言説を検討している。
●人物伝としては、北島万次『加藤清正―朝鮮侵略の実像』（吉川弘文館、2007年）が読みやすい。
●中村栄孝『日鮮関係史の研究 中』（吉川弘文館、1969年）は、考沙也可をめぐって、その実在を否定する論を否定し、実在を論証した。

114

第4章―世界がつながる時代 115

〈まとめ〉

この戦争は、朝鮮と日本の民衆にとってどのようなものだったか各自がまとめ、発表し合う。

■ 参考文献

「本文・図版・側注解説」などに出典を記しているが、そこで扱っていない教材研究に役立つ著作を紹介。